

芦屋大学論叢 第78号
(令和5年3月8日)抜刷

保育内容の領域「言葉」と「環境」に関する一考察

－保育園における環境構成を事例として－

安 藝 雅 美

保育内容の領域「言葉」と「環境」に関する一考察

—保育園における環境構成を通して—

あき 安藝 雅 美

芦屋大学臨床教育学部

はじめに

新型コロナウイルス感染拡大によりマスク生活が始まり約3年。保育現場からは、成長に重要な乳幼児期に子どもが他者の表情を読み取る機会が減り、情緒の不安定や発達の遅れが生じるのではと懸念の声が上がっている。文部科学省作成の「学校における新型コロナウイルス感染症に関する衛生管理マニュアル～『学校の新しい生活様式』～」¹⁾を踏まえて、「学校教育活動においては、身体的距離が十分とれないときはマスクを着用すべきであるが、気温・湿度・活動の態様や児童生徒等の様子を踏まえ、現場で臨機応変に対応すること」とし、特に幼稚園においては、幼児特有の事情を考慮し、「本人の調子が悪い場合や、持続的なマスクの着用が難しい場合は、無理して着用させる必要はない」等、適切な対応をするよう、市町村教育委員会を通じて通知している。また、乳児保育を行う保育所等では厚生労働省作成の「保育所における感染症対策ガイドライン」(2022(令和4)年10月一部改訂)²⁾によりマスクの着用について「乳幼児については、乳幼児一人一人の発達の状況や体調等を踏まえる必要があることから、他者との身体的距離にかかわらず一律にマスクを着用することは求めていません。特に2歳未満では、息苦しさや体調不良を訴えることや、自分で外すことが困難であることから、窒息や熱中症のリスクが高まるため、着用は推奨されていません。」とある。これらは、子ども側に対するものであり対面する保育者についての対応はマスクをつけた状態での保育が続いているのが現状である。保育現場ではこのような状況下、保育者のマスク着用による表情が読み取れないことに対する発達リスク以外の面で、子どもの発話を促す様々な環境構成の工夫や取り組みを行っている。本研究では、保育の環境と言葉の相互作用について現場の環境構成の工夫による取り組み事例をもとに考察する。

1. 研究の目的

幼稚園教育要領³⁾・保育所保育指針⁴⁾にある保育内容の領域「言葉」と「環境」は、相互に作用しあい言葉が引き出されたり環境が変化したりする。保育園の特色と共に、環境が乳幼児と保育者の関係性を築く要因となっている点に焦点を当てて解き明かすことにより、現場研修や保育・幼稚園実習指導をはじめとする保育者養成に活かすことを目的とする。

2. 研究の方法

2-1 研究園および倫理的配慮

保育園訪問時に、環境撮影し保育者から随時口頭にて聞き取りを行った。

研究協力園：埼玉県川越市にある社会福祉法人あゆみの会認可保育園高階すまいる保育園⁵⁾

(文中ではT園とする)

訪問記録日：2022年8月

観察場所：室内保育室

当該保育園に研究計画を説明し、園名公表を確認し、実践研究公表同意書を交わした。

2-2 研究園について(沿革)

平成22年12月 社会福祉法人創設

平成23年4月～令和2年4月までに埼玉県川越市に認可保育園2園，子育て支援センター1カ所

埼玉県ふじみ野市に認可保育園2園，子育て支援センター2カ所，企業主導型保育園1園

2-3 研究園について(保育の進め方)

T園の母体である社会福祉法人は、図1のように組織を明確に作り、保育や安全、研修や食育、保護者・地域支援、事務やICT等について各園の委員が話し合い、方針を決め園の保育に活かす仕組み作りを行っている。複数の外部アドバイザーの知見を取り入れ、姉妹園同士が連携している。このように働く教職員の皆が積極的に意見を出し合える環境作りを行っている。

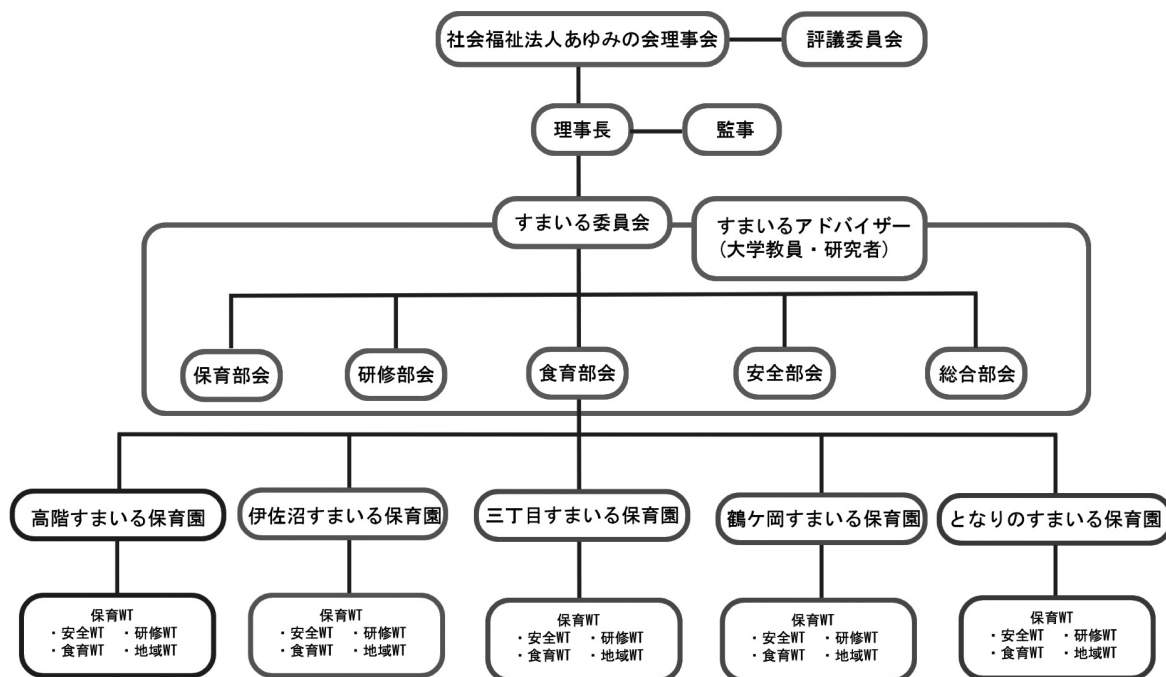


図1. すまいる委員会(保育の進め方) 引用元(T園HPより)

ワーキングチーム

各園にはすまいる委員会に対応する保育や安全、食育や研修等のワーキングチームがあり、チームのメンバーは委員としてすまいる委員会に参加したり、すまいる委員会で話し合われたことを、ワーキングチームを通じて園内に伝える。

保育部会：豊かな体験が子どもを育てる

0歳～1歳児，1歳児～2歳児，3歳児以上の発達別に保育を考える3つの委員会があり，子どもたちの発達を促す環境や活動を話し合い，各園で実践する。

安全部会：保育園は安全，安心が第一

安全委員会と保健衛生の看護委員会がある。安全委員会では事故を防止するため，「ひやりはっと」を持ち寄り，事例を検討し，看護委員会では，けがや体調不良時の対応，感染症対策等について話し合う。

食育部会：子どもの「食を営む力」を育成する

保育食育委員会と厨房食育委員会があり，保育食育委員会ではクッキングや野菜を育てる，厨房委員会では献立や厨房の業務について話し合う。

研修部会：保育の質を高めるために

研修計画・自己評価委員会と保育環境委員会があり，研修委員会では保育者の研修育成や保育者の自己評価，環境委員会では大学の専門家とともに委員が各園を巡回し，遊具やコーナー，活動やかかわり方等，保育環境を話し合う。

総合部会：子どもたち，保護者の方，働く仲間の人権を守る

保護者委員会，地域委員会，オンライン委員会，内部監査，事務委員会があり，ICT化や事務や監査について話し合い，園と本部が一体となり保護者支援や地域貢献を進めている。

すまいるアドバイザー

すまいる委員会は，保育や環境，発達等についての外部の専門アドバイザーの知見を活かし園内研修やOJT，ワークショップ等に取り組む。

2-4 研究園について(保育の考え方)

T園の法人全体のホームページのトップに出てくるのは「むかしこどもだったことを忘れずにこどもにとってうれしいおとなでありたい」という言葉であり，理事長の思いである。子どもに対しては「自分のことがすきなこども・自分のことができるこども・えがおをふやす・暮らしでつむぐみらい」とある。ここにこの法人の保育理念が凝縮されている。

保育目標：「身体を使うのが大好きな子」「頭を使うのが大好きな子」「人と関わるのが大好きな子」を育むこと。子どもたち自身の「自分で考える力」を育むため、子どもたちの主体的な活動を大切に、環境を通じた保育を行います。

たてわりではない異年齢児保育

子どもは自分より少し年上の子どもが大好き。なんでも真似をしたがり，意欲や好奇心が自然に広がる。上の子は下の子に教えることで経験や知識が定着し，また思いやりや優しさが育まれる。4月生まれと3月生まれでは同じクラスでも約1年の年齢差がある。たてわりでない異年齢児保育の中で，それぞれの発達にあったグループが自然に出来，それぞれの発達に合った活動が広がっていく。

子ども主体の保育

子どもに対する時間や空間の制限を極力小さくし，発達を踏まえ複数の活動や遊びのゾーンを用意する。子どもたちは遊びたいものや活動を自ら選び，子ども自身の創造力や想像力を育むようそれぞれのゾーンを工夫している。各ゾーンは子どもたちの発達に合わせ見直していく。昼食は11時半から13時の幅の中で子ども自身が食べる時間や食べる量，座る場所などを決める。また発達上，午睡が必要のなくなる3歳以上児については，発達や体調を考えたいうで午睡をするかどうかを子ども自身にも考えてもらう。

ねらいに応じた選択制の保育

保育所保育指針では「健康」「人間関係」「環境」「ことば」「表現」の5つの領域での活動を通して「好奇心や気づく力」「工夫をする力」「粘り強く取り組む力」等、生きる力（非認知的能力）を育むことが「ねらい」となっている。すまいるの保育は「身体を使うのが大好きな子」「頭を使うのが大好きな子」「人と関わるのが大好きな子」を「ねらい」としゾーンや活動を計画する。子どもたちが主体的に5つの領域の経験をまんべんなく深めていけるよう、活動の順番を選択できるようにする等、工夫していく。

かかわりを大切にした保育

「養護」は保育の基盤であり、子どもたちは安全で安心できる気持ちになれば自然に周囲に興味を広げ、いろいろなことに挑戦をはじめめる。子どもたちの情緒の安定のために保育者は子どもの気持ちに寄り添い応答的に関わっていく。また子ども同士の関わりや地域の方との関わりを大切にしている。

チーム保育

保育はグループ担当制ではなく、にこにこ組（0歳児グループ～2歳児グループ）、わくわく組（3歳児グループ～5歳児グループ）の各保育者でそれぞれのクラスを見守る（図2）。保育者は子どもたち一人一人の発達を食事や排泄、着脱等の生活面や衛生・身体機能の発達、運動や人間関係、環境や探索、言葉は表現などの100項目以上のポイントで丁寧に確認し、必要な環境や関わり方を考えていく。

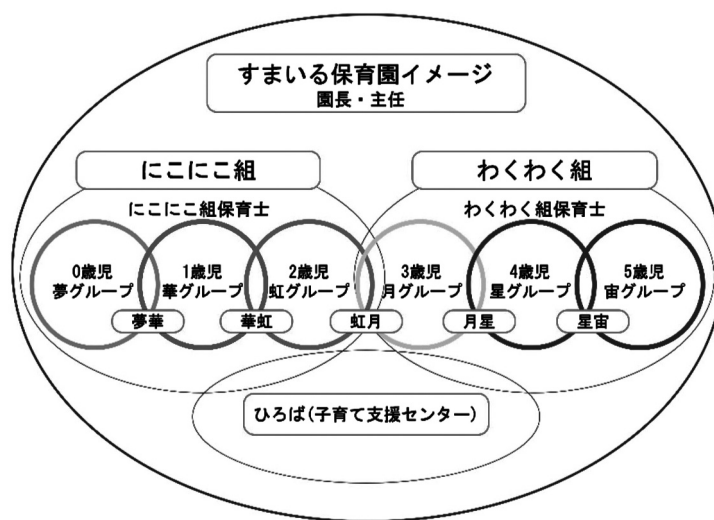


図2. チーム保育 引用元（T園HPより）

2-5 研究園について(全体保育年間計画)

T園の年間保育計画から保育の「環境」「言葉」⁶⁾と、T園が掲げている保育のポイントを抜粋し、表1にまとめた。

年齢	育ちのキーワード	発達の様子	保育の環境	領域「環境」	領域「言葉」
0歳	自分との出会い	大人からの働きかけに応える時期	信頼と注意を育てる環境 仰向けやうつ伏せで腰を中心に全体を動かす環境 見る・触る・舐めることができる環境	精神的発達 身の回りのものに親しみ様々なものに興味や関心を持つ 見る・触れる・探索するなど、身近な環境に自ら関わろうとする。	社会的発達 人とかかわる力の基礎を培う 身体の動き、表情、発声により気持ちを通わせようとする。 生活や遊びの中で、保育者や友達など身近な人のそんざいに気付く。
1歳		環境を探索する時期	自由に探索できる環境。 這う、登る、転がるなどの基本的な動きが経験できる環境 起きている間中、手を使える環境	身近な自然に興味や関心を持ち、探索して遊ぶ。 身近な環境に親しみ、保育者と共に生活や遊びを楽しむ。	保育者の応答的な関わりや話しかけにより、自ら簡単な言葉を使おうとする。

年齢	育ちのキーワード	発達の様子	保育の環境構成	領域「環境」	領域「言葉」
2歳	他者との出会い	自我が拡大し自分の遊びが生まれる時期	粗大な動きと多様な運動ができる環境 物を操作し道具を使用する環境 想像力と言葉を育む環境 一人遊びと並行遊びを保障し自我の拡大をうけとめる環境	身近な自然や事象に興味や関心を広げる。植物や生き物、土・水・泥などの事前物に興味を持ち、触れたりあそんだりすることを楽しむ。	言葉への興味や関心を持ち、言葉のやり取りを楽しむ。 絵本や紙芝居を楽しみ、簡単な言葉を繰り返したり、模倣したりして遊ぶ。
3歳	言葉との出会い	対象に合わせた調整機能が高まる時期	調整を伴う運動ができる環境① 生き物と出会い採集や栽培ができる環境② 友達とごっこ遊びをする環境③ 言葉による表現を促す環境④ 造形による表現の世界を広げる環境⑤	生活の中で、さまざまな自然や事象に触れ、親しみをもって自分から関わろうとする。 身の回りの物の色・量・形などに関心を持ち、分けたり集めたりする。	経験したことや感じたことを。自分なりの言葉で伝えようとする。 生活や遊びに必要な言葉が分かり、使おうとする。
4歳	グループとの出会い		こどもの個性に対応し多様な経験を保障する環境⑥ 概念を体験的に学習する環境⑦	自然や身近な事物に興味を持ち工夫して生活や遊びに取り入れられる。身の回りの物の色・量・形などに関心を持ち数えたり比べたりする。	自分の思いを伝えたり、相手の話を聞いたりして会話を楽しむ。 絵本や紙芝居などを通して、ストーリーや言葉の面白さに気付く。
5歳	ルールとの出会い	協同的な学びへと向かう時期	体験から抽象的な学習へつなぐ環境⑧ テーマを持って共同作業を継続的に行う環境⑨ 根気強く、細かな調整機能を伴う活動ができる環境⑩ 年長児の挑戦的な活動ができる環境⑪	様々な事物や自然に主体的に関わり、試したり発見したりしながら、工夫して遊ぶ。 生活の中で物の性質や数量、図形、文字、時間などに関心を持って関わる。	友達と考え言葉で伝え合い、相手の話を聞こうとする意欲や態度を身に付け遊びを発展させる。

表1. 保育のポイントや環境構成と、保育内容の領域「環境」と「言葉」の関係 (T園HP, 2022年度保育年間計画より抜粋)

2-6 研究園について(年間行事)

春：入園式、進級式／慣れ保育、内科検診／普通救命救急講習

夏：七夕遊び、夕涼み会、クラス懇談会、歯科検診、総合防災訓練

秋：総合防災訓練・引取り訓練、ハロウィン、親子ふれあい遊び会、内科検診

冬：ウィンターフェスタ 伝承遊び会、節分、クラス懇談会、保護者総会、ひな祭り、卒園式

3. コロナ禍における新たな保育実践等に関する視点

全国保育士会の「令和2年5月末、保育所・認定こども園等における新型コロナウイルス感染症の対応に伴う影響等について、全国保育協議会協議員および全国保育士会委員等の関係者を対象にした緊急のアンケート調査」⁷⁾の結果、「新型コロナウイルス感染症への対応が長期化する現状を踏まえて、全国の対応状況や課題等に関する実態調査の第2弾」により、保育の専門性を発揮するために、子どもの遊びや生活の場面で工夫して取り組んでいることの有無として、下記の結果が視座された。

成功している、もしくは特徴的な取り組み内容

■ ICT の活用

- ・動画の配信やSNS（LINE、Facebook等）、ホームページ等を使用して、子どもの様子や情報を発信する取り組みが多くみられた。
- ・面談等をリモートで実施しているとの回答もみられた。

■ ICT によらない発信

- ・施設内に子どもの活動の写真の掲示や作品の展示をしたり、園だより等の手紙の発行回数を増やす等の取り組みが多くみられた。
- ・地域のテレビ局に行事等を撮影・放送してもらおうとの回答もみられた。

■ 保育者の負担増

- ・動画や写真の撮影や編集等に時間を要するとの回答が多くみられた。
- ・WEBシステムの扱いに慣れる必要があるとの回答もみられた。

■ 保護者からの理解や要望等

- ・SNSの使用の際に保護者の理解を得ることや、データが拡散されないようなルールの設定が必要であるとの回答がみられた。

取り組みにおける課題や対応

■ 子どもへの影響

- ・子ども同士のふれあいの制限や地域の人々との交流の中止等により、成長への不安を感じている回答が多くみられた。
- ・活動の制限により、遊びのマナー化や体力維持への影響といった回答もみられた。

■ 保育者の負担増、人材不足

- ・分散した活動や新しい取り組みのための準備により、保育者の負担増や人材不足が生じているとの回答が多くみられた。

■ 設備

- ・ICTを活用した取り組みを進めるにあたり、機材が不足している等の回答がみられた。
- ・新たな備品等の導入のためコストがかかるとの回答もみられた。

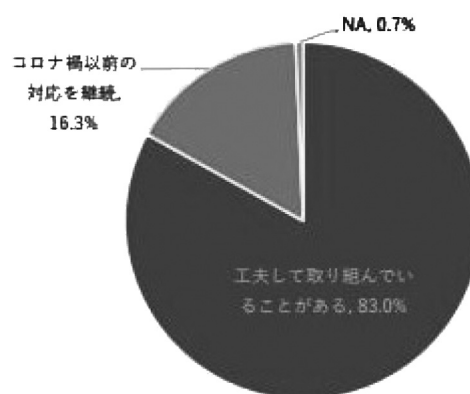


図3 保育の専門性を発揮するために、子どもの遊びや生活の場面で工夫して取り組んでいることの有無

■ 感染防止の限界

・保育者と子ども、子ども同士の接触は、愛着や信頼関係の形成のために欠かせないものであり、完全に避けることは困難であるとの回答が複数みられた。

・雨天時や冬季は室内の活動が多くなり、接触が多くならざるを得ないとの回答もみられた。

以上の事から、コロナ禍の環境下、保育者の実践の工夫や取り組みがあること。それによって、新しい環境構成として ICT への活用が広がった反面、ICT が使えない場面での課題等があることが分かった。

4. T園での子どもたちから言葉を引き出す環境構成の取り組み

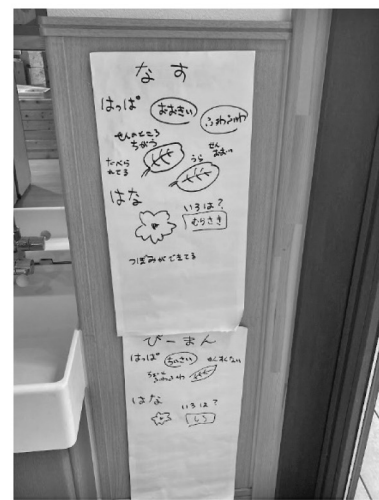
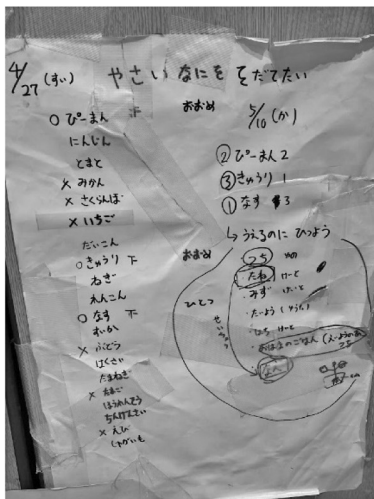
本研究では、幼児（異年齢）クラスでの取り組みに焦点を当てる。

実際に写真を通して、T園が掲げている保育のポイントである環境構成を表1の下線①～⑩に照らし合わせ、領域「環境」と「言葉」の相互作用を考察する。

4-1 玄関から入って来た時の環境構成の工夫



- ②野菜を育てる
- ④気持ちを表すカード
- ⑦今日の日いち自作カレンダー



保育の環境構成② 野菜を育てる

玄関入り口にて野菜を育てていることで、必ず子どもたちが毎日観察できる。また、親子で見ること出来るので会話が自然と表出される。撮影は8月であるが、4月に「何を育てたいのか」子どもたちと話し合った意見を保育者が記入したものが現在も貼ってある。子どもが発見したことを図や言葉で表し、さらにそれを見て、日常の中で会話が広がっていることが分かる。

保育の環境構成④ 思いを伝える

乳児室にも幼児室にもあるこの入り口の表は、こどもが思いを言葉に表せないとき自分で持ってきて指さしたり、保育者が「いまどんな気持ち？」と子どもの心を確認めるときに使用する。

泣いていても、心の感情は色々あるので、保育者が決めつけたり思い込まないためにも役立つ。

毎朝登園時、子どもたちに尋ねるようにするとの事。

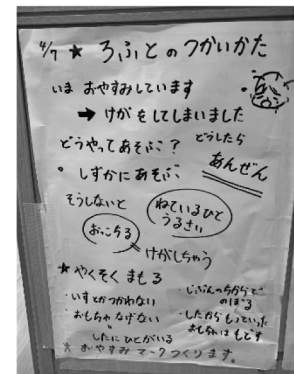


保育の環境構成⑦ 手作りカレンダー

毎日の連絡帳にシールを貼るたびに「今日は何日？」と考える。シールを貼る机には、今日の日にちが分かる物、カレンダー、そしてこの手作りカレンダーがあり、子どもが色々な物を見て時間や日にちの概念に興味関心を持てる工夫がある。

4-2 幼児クラス室内の環境構成の工夫

環境構成①③⑥⑪ 保育者と子どもたちで作った、室内ロフトハウス





このロフトには、上に上がる階段はなく、四つの柱に足をかけて登るしか方法がない。子どもたちは、どうすれば登れるのか話あったり、登ろうと挑戦する子どもを応援しあったり、ルールを作ったり、怪我が出ればまたルールを練り直すなど、子どもたちが納得いく中で行うためルールをお互いに守り、見合い、その都度確認しあうなどが行われている。がんばるとは、「がんばれ！がんばれ！」ということではない。子どもたちは毎日、「きょうここまでのぼれた。今回はここまで」と言い合っているとの事。

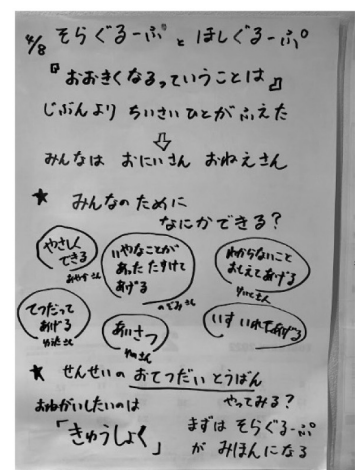
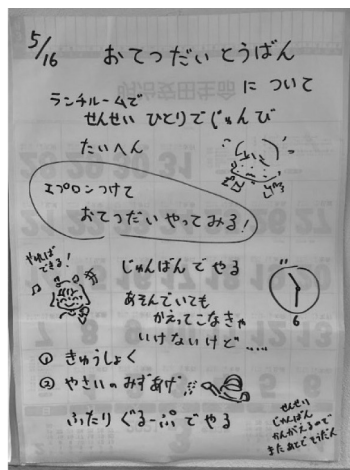
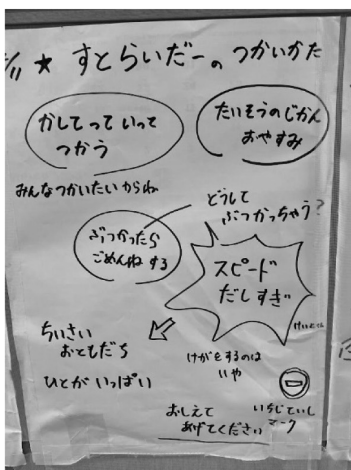
子どもが自力で登れないところに親が抱っこして乗せたりすると怪我につながる事がある。

環境構成④⑤ 壁面は子どもたちが作った作品を飾ったり貼ったりする場所



壁面は、保育者が作ったものを飾るのではなく、こどもが「飾ってほしい、貼ってほしい」といった物や、子どもに貼ってもよいか確認して貼るとの事、こうすることで子どもが納得し喜んで鑑賞しお互いに見合っ、会話が表出される

環境構成④⑧その都度行われる話し合い



常に、子どもたちと話し合うことを行っている。

環境構成④⑥⑩手作り舞台



ここでは、卒園式はもちろん、普段からある舞台なので子ども達が独自に考えて、歌を歌ったり踊ったりと色々発表やコンサートの場となり、多様な表現の場である。

環境構成③④⑧



ここは元々教材室であったが、子ども達を観察する中でごっこ遊びのスペースにする事を思い付き保育者が作った。

その他、ごっこ遊びやままごとなどのスペースや準備物は他にもあるが、ここでは研究園に特徴的な環境構成に焦点を当てた。

5. まとめ

本研究は、コロナ禍の中、子どもの発話を促す様々な環境構成の工夫や取り組みを、保育の領域「環境」と「言葉」の相互作用について事例をもとに考察することであった。

研究園は保育園であったが、以下の表2に示す通り、幼稚園教育要領と保育所保育指針の文面は、「先生」と「保育士」の違いのみであるので、本研究園の年間保育計画における「環境」「言葉」は保育所保育指針に基づいて作成されたものであるが、それは幼稚園においても活かせるものであると考える。

表2 幼稚園教育要領と保育所保育指針における領域「環境」「言葉」

幼稚園教育要領 領域「環境」ねらい	保育所保育指針 領域「環境」ねらい
周囲の様々な環境に好奇心や探究心をもって関わり、それらを生活に取り入れていこうとする力を養う。	周囲の様々な環境に好奇心や探究心をもって関わり、それらを生活に取り入れていこうとする力を養う。
(1) 身近な環境に親しみ、自然と触れ合う中で様々な事象に興味や関心をもつ。	① 身近な環境に親しみ、自然と触れ合う中で様々な事象に興味や関心をもつ。
(2) 身近な環境に自分から関わり、発見を楽しんだり、考えたりし、それを生活に取り入れようとする。	② 身近な環境に自分から関わり、発見を楽しんだり、考えたりし、それを生活に取り入れようとする。
(3) 身近な事象を見たり、考えたり、扱ったりする中で、物の性質や数量、文字などに対する感覚を豊かにする。	③ 身近な事象を見たり、考えたり、扱ったりする中で、物の性質や数量、文字などに対する感覚を豊かにする。

幼稚園教育要領 領域「言葉」ねらい	保育所保育指針 領域「言葉」ねらい
<p>経験したことや考えたことなどを自分なりの言葉で表現し、相手の話す言葉を聞こうとする意欲や態度を育て、言葉に対する感覚や言葉で表現する力を養う。</p>	<p>経験したことや考えたことなどを自分なりの言葉で表現し、相手の話す言葉を聞こうとする意欲や態度を育て、言葉に対する感覚や言葉で表現する力を養う。</p>
<p>(1) 自分の気持ちを言葉で表現する楽しさを味わう。</p> <p>(2) 人の言葉や話などをよく聞き、自分の経験したことや考えたことを話し、伝え合う喜びを味わう。</p> <p>(3) 日常生活に必要な言葉が分かるようになるとともに、絵本や物語などに親しみ、言葉に対する感覚を豊かにし、先生や友達と心を通わせる。</p>	<p>① 自分の気持ちを言葉で表現する楽しさを味わう。</p> <p>② 人の言葉や話などをよく聞き、自分の経験したことや考えたことを話し、伝え合う喜びを味わう。</p> <p>③ 日常生活に必要な言葉が分かるようになるとともに、絵本や物語などに親しみ、言葉に対する感覚を豊かにし、保育士等や友達と心を通わせる。</p>

領域「環境」におけるねらいである「周囲の様々な環境に好奇心や探究心をもって関わり、それらを生活に取り入れていこうとする力を養う。」において、T園では、環境構成①～⑩において好奇心や探究心を持ち生活に取り入れる様々な工夫がなされていた。また、その工夫により、領域「言葉」におけるねらいである「経験したことや考えたことなどを自分なりの言葉で表現し、相手の話す言葉を聞こうとする意欲や態度を育て、言葉に対する感覚や言葉で表現する力を養う。」という、子どもが経験したことや考えたことを言葉で表現したことを保育者が字で書き表していた。その中には色々な意見が表出されており、相手の話す言葉を聞こうとする意欲や態度も養われていくことが容易に想像できる。また、クラスが異年齢で構成されているため、3年間の中で年少児から年長児にかけて見て聞いて学ぶ力も大きいと考えられる。保育の中で子どもとの話し合いが臨機応変に行われていることは、子どもがなにか思いを溜めたその時行える環境であり、思いをすぐに出し合えることでストレスがたまりにくい環境下であるといえる。

また、このような時間を確保できる背景には、T園にいわゆる一般的な一斉保育において行われている、運動会・お遊戯会・音楽会等の行事が無いということが大きいであろう。また、大きな一斉行事が無いことは保育者のストレス軽減にもつながっていると考えられる。

子どもの言葉と言語環境に関する研究(坪井, 2011)⁸⁾では、子どもの表出を受け止める環境として、「子どもの言葉を育てるためには、表出しやすい雰囲気や、あるいは表出を受け止めてくれる環境が重要であり、集まりの場面で話しをするような活動では、話し方だけではなく、聴く力も育てなければならない。そして、話したい、自分が発見した内容を知らせたい、やり取りをしたいと思える集団作りが肝要となるであろう。」と指摘している。保育の集まり場面で話し合う機会を持つ園は多いが、そのような場では緊張する子どもや時間が足りずに思いを話せないまま終わる子どももいる。T園のように子どもが話し合いたいと持った時になるべく時間を作ることでできる環境はまさに指摘している環境をカバーしている。

未だ収まる様相が見えないコロナ禍で、先に示した全国保育士会における調査の中にあつた、課題や対応として、子どもへの影響に「活動の制限により、遊びのマンネリ化や体力維持への影響」があつたが、T園では室内でもロフト等による体力維持の仕掛けやマンネリ化しない遊びの工夫があつた。また、保育者への

影響として「分散した活動や新しい取り組みのための準備により、保育者の負担増や人材不足が生じている」とあったが、本研究では取り上げなかったがT園ではいち早くICTを導入し研修を行うなど、保育の進め方としての「すまいる委員会」(図1)にあるように5つの園の保育者同士が助け合い補助する機能が働いているため保育者への影響も他園に比べて少なかったのではないだろうか。子どもと一番向き合う保育者にゆとりがあるからこそ、子ども達に対する環境構成の工夫やアイデアが出てくるのではないかと考える。

T園の聞き取りの中で一番印象に残っているのは、理事長が話されていた「私が一番大事にしているのは、子どもや保護者ではなく保育者です。保育者を大事にすることによって、保育者が子どもを大事にし保護者へ伝わると思うからです。」という言葉であった。この思いがT園の人的環境にも物的環境にも表れていることが伝わってきた。

本研究では幼児クラスのみに焦点を当てたが、次は乳児室の環境構成についても考察していきたいと考える。

謝辞

本研究にご協力くださった社会福祉法人あゆみの会理事長様、高階すまいる保育園長様に心より感謝申し上げます。

引用文献

- 1) 学校における新型コロナウイルス感染症に関する衛生管理マニュアル～「学校の新しい生活様式」～(2022.4.1 Ver.8).
https://www.mext.go.jp/content/20220404-mxt_kouhou_01-000004520_01.pdf
- 2) 保育所における感染症対策ガイドライン, 厚生労働省, 2018(平成30)年3月(2022(令和4)年10月一部改訂).
<https://www.mhlw.go.jp/content/001007669.pdf>
- 3) 文部科学省著, 幼稚園教育要領解説 平成30年3月, フレーベル館.
- 4) 厚生労働省/編, 保育所保育指針解説 平成30年3月, フレーベル館.
- 5) 社会福祉法人あゆみの会, <https://www.ayuminokai.jp/childcare-period/>
- 6) T園は保育の環境, 領域「環境」「言葉」の一部は, 高山静子著:改定環境校正の理論と実践:保育の専門性に基づいて, 2021, を引用している.
- 7) 全国保育士会:新型コロナウイルス感染症への対応等に関する調査結果(概要版),
https://www.z-hoikushikai.com/download.php?new_arrival_document_id=108(参照日2023年1月9日).
- 8) 坪井貴子:幼児教育における子どもの言葉と言語環境に関する考察, 東海学園大学教育研究紀要 第5巻, 2021, p25-p35.

参考文献

- 1) 増田修治:子どもの言葉を育てる保育とそのための環境作り親を巻き込む保育実践, 和光大学現代人間学部紀要 第4号, 2011年3月, p165-p181.
- 2) 国吉 貴子:幼児期に言葉の感覚を豊かにするための援助のあり方～「言葉遊び」「お話作り」を通して～, うるま市立天願幼稚園.
- 3) 金子亜弥:保育内容の領域「人間関係」に関する一考察ー保育所における1歳児の行動観察記録を事例としてー, 埼玉東萌短期大学研究紀要第20号, 2022, p11-p21.